

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	梶浦 恭子
最終学歴	学 位	専門分野
岐阜大学大学院教育学研究科 教科教育専攻・家政教育専修（修士課程）	修士	幼児教育

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

①幼稚園実習の中で、学生は

- ・ 幼児の動きや遊び方に幼児の内面理解をふまえた援助方法を考え、行動実践する。
- ・ 保育者の仕事内容とその責務の重厚さを受容・理解し、自分なりの判断行動ができる。
- ・ 真面目さと誠実さ、意欲ある取り組みができる資質、態度を身につける。

②保育者や教育者に求められる実践的な知識と技術を習得するための指導方法を追求する

（計画）

① 「教育実習 I（幼稚園）事前事後指導」

- ・ 実習前後の教育活動を確実に習得するよう、提示した計画に自ら取り組み内容が理解できたか、演習（レポート作成、模擬保育）等をし、身体で学びとるようにしていく。不安を緊張感に変え、実習に期待ができる位の準備をして万全にし、安定した心情で実習に臨む学生の、真面目で誠実ある姿勢づくりができるよう貢献する。
- ・ 実習への組み方について、幼児の発達や特性をふまえた理解と知識を獲得した内容をふまえた実習の心構えが事前にできているか、「実習にあたって」の記述内容をしっかり見て取る。
- ・ 実習日誌、指導案作成が計画性を持ってできているか、協同学習活動、或いは個別対応し確実にする。
- ・ 保育実習経験の幼児コースには、幼稚園生活の特徴（一日の流れのリズムについて、各園特色がある、保護者のニーズ理解等）をふまえ、教育の面では各施設共通していることを理解するよう指導する。
- ・ 初等コース（保育実習未経験者を含む）には、授業の内容を基本にし、社会人としてのマナー、倫理観、心構えといった養成校の指導、事務的手続き、安全と衛生-事故防止と疾病予防・対応の内容を理解した上で、準備を行うよう指導する。
- ・ 振り返りを重視する。報告書の事例（エピソード）を書くまでが教育実習（幼稚園実習評価）であると指導し、個別面談前に提出させる。
- ・ 実習を終え、個別面談（自己評価有）を設定する。学生の実践が、自発的で意欲的な動き方ができていたか、幼児の内面理解をふまえた援助方法であったのかを自己評価票にて確認する。その後、幼児、保育者、保護者の言動を受容し理解したものであったかを聞き取り考察していく。

②基礎、総合、専門演習

- ・ 学生のクラス演習活動が有意義になり、大学で学ぶが楽しい、仲間と協働体験が有意義であることを実感する
- ・ 学生が望む学習課題を自ら仲間と一緒に決め、例えば以下のア)イ)内容に親しみ実践活動でできる内容を検討する。大学祭の行事運営につながり、社会に通じる力（社会性、協同性、柔軟

性等)を養う。

例. ア) 幼稚園の指導案を抜粋した集団ゲーム遊び(フルーツバスケットをする)の指導案を提示して、その指導案どおり先生役、子ども役になって実践する。

例. イ) 新聞から、教育雑誌(発達、幼児と教育)から、絵本からと、対象物を決めて、興味、関心ある社会で起きている状況をまとめて文章化し、気づいた事柄を発表したり質問したり意見交流して知識を広め、資料による有効な活用方法を探る。また、社会に貢献する、発信する、行動を起こす実践力を備える。

○担当科目(前期・後期)

(前期)

教育実習Ⅰ 事前事後指導、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、
専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、教育実習Ⅰ(幼稚園)

(後期)

保育内容(環境)、生活、生活科教育法、教職実践演習、生活、サービスラーニング実習Ⅱ、
基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

①「教育実習Ⅰ(幼稚園)事前事後指導」について

(1) 学生による実習準備行動

- ①実習園訪問から実習は始まると捉え、電話のかけ方等、注意事項と持ち物の確認を入念に行った。具体的には、上靴持参、挨拶やことばづかい、実習担当の先生からは実習に必要な話を確実に聞き取り速記する等の説明をする。その後、訪問時におけるロールプレイの実践を行った。
- ②「保育現場の用語」理解については、1)実習日誌の書き方、2)指導計画の配布事例を基に、自分ならどう記入するかを学生に問いかけ、演習活動する。
- ③昨年の実習経験学生をゲストとし、失敗談から工夫やアイデア話を聞いて事前の心構えや準備の参考にする。
- ④教材の見本(ペープサート)を提示し部分活動に活かせるよう意欲づけた。

(2)「実習にあたって」、「実習日誌」、「指導案」作成について

- ・8月4週目の3日間を特別講座の開講をし実習準備対策日とし、9月実習に向かわせた。
- ※対象は全員だが、実習園の評価が、「実習記録と指導計画項目」に課題が有る学生には特に最後の指導計画の「導入」～「結び」の片付け場面の配慮内容確認文章まで見届けた。

(3) 個別面談

- ・保育者(教師)として子どもへの場面に応じた配慮や援助方法、実習から得られたこと、自己課題を振り返り、将来の自分に必要な今後の学習内容は何かの追究を行った。
- ・姿勢・態度、言葉づかい、自己課題の反省ができたか、報告書や学期末課題レポート提出物内容に着目し、総合評価を行った。
- ・実習後の個別面談をこれまでの15分を、30分程度の持ち時間(個別に対応)で行うようにした。

○作成した教科書・教材

【教材】:「教育実習(幼稚園)」活用

- ・教材の見本(ペープサート、ミニ絵本)

実習の自己紹介や絵本「とんぼのうんどうかい」読み聞かせ、歌「とんぼのめがね」指

導の導入に活用できるフェルト（工作用）生地作品トンボの試作品と、コピー用紙1枚でポケットに入るミニ絵本（おうち絵本）の試作品。

② 基礎、総合、専門演習 について

- ・前期総合演習Ⅰ学生（2年生）は、2人組で指導案作成ができ、仲間にぜひ広めたい計画を紹介し行った。先生役、子ども役に分担して実践する。
- ・前期総合演習Ⅰ学生（1年生）は、ボールを使った室内遊びや戸外では自然に親しむ遊びを実際に平和公園で行えた。「幼児と遊び」類の文献は5冊から7冊を選書し読み、最終的に子どもの頃に親しんだと思われる遊びを、後期には各自がまとめてゼミ発表することができた。新聞は写して感想を述べたり要約しまとめたり、授業レポートの書き方を「レポートの組み立て方」木下（2004）を皆で読み、習って文章を構成するようにした。
- ・専門演習学生（3年生）は、自然体験活動の学外活動の計画が10月に企画、実践できた。

○自己評価

①「教育実習Ⅰ（幼稚園）事前事後指導」について

- （1）・実習準備については、自作の絵本作り、身近な動物ペーパーサート等の教材開拓を行い、部分指導の導入に利用した等と、実践とその成果の報告があった。
- （2）・初等学生の実習初体験の不安感が、幼児コース学生にライン等のやり取りを招く事態となり実習中の問題になった。今後の喚起事項で、質問等は実習担当と交流するよう厳重に注意した。
 - ・実習園訪問担当者の「訪問指導報告書」は、学生の様子や各教員の気づき書かれる。だが、途中で体調不良で実習期間の欠席や実習取りやめ対応で担当者の注意がその他の学生に向けられない事態が発生する等、実習担当者として反省するところが多かった。
 - ・学科会議（課程委員会）の学生動向において、多様な学生の行動理解をしておくために、教（職）員間で報告したり、日常においても学生の動きを確認し合ったりという連携の必要性を感じる事項が多くあった。
- （3）・配慮を要する学生への面談は、教員2人の入念な事前打ち合わせの上で行うようにした。面談回数が学生によっては3から4回に及んだ。

前期の6月実習は無事に済ませたが、9月実習前の8月途中で実習取りやめの決断をする学生には途中で進路変更する学生がみられ、面談は学生の背景にある環境を理解しながら園事情を考慮することも含め、課題解決に向かうための面談には多くの時間を要し、なお素早い園への対応が必至だった。

 - ・実習継続に不安となる理由が、学生自身の問題でなく外的要因の場合には、学生支援とケアをゼミ担当者と連携して早急に行った。その結果は良い方向性が得られた。園へは学生の特性理解と課題の適切化（音楽表現の削減）を要望した。実習に行くことに揺らぐ気持ちを持つ事例には、慎重な教員による面談と教職員連携が如何に重要かが確認できた。

② 基礎、総合、専門演習 について

- ・基礎演習、総合演習では、リーダーが率先して動き活動を積極的に進めたため、周囲の学生も力を発揮する良い関係性ができていた。特に2年生は実習で多忙な中であつたにもかかわらず、最後まで方向性を持って協力してテーマの課題をまとめ・発表ができたことは高く評価できる。

ゼミ全員が提出すべき課題レポート作成については、資料や文献読書を進め思考力、創造する力の発揮には充分ではなかった。研究テーマの選択から記述内容を、豊かにするための教員の粘り強い学生への援助が適宜必要であった。考察、分析、追究に深く至るためには学生同士の意見

交流ができるよう、互いに認め合い、信頼関係が基盤となるゼミクラス経営に気を配る必要があった。

・3年生専門演習では、自然環境に存在する虫や植物への関心は、個々に違うことを理解しなければならない。押し付けず、興味関心のある研究活動を見つけて、意欲的にできるよう学生対応を行い、個々の興味関心の追究を率先して行える体制を整えたい。

II 研究活動

○研究課題

自然体験活動と乳幼児 ―乳幼児はどのように自然環境と出会い保育者や仲間とどう遊びをつくるのか―

○目標・計画

(目標)

乳幼児はどのように自然環境と出会いどう遊びをつくり出すのか

(計画)

- ・研究方法は、幼児の行為・動作を、カメラ撮影し、遊び場を研究者が抽出する。
- ・幼児の行動は心情の現れと考えている。動きを観察し、捉え、収集した事例に法則性はあるのか。
- ・そこには教育的な価値はないだろうか、幼児が表現する行為の一般的な意義（体験は危険を伴うが教育的意味）を導きたい。
- ・研究目標に向かうため、継続的に「森のようちえん」という自然体験フィールドを訪問する計画である。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・江田司 梶浦恭子 田中まさ子 谷口篤 横井志保 他 8人『教育実習の手引き(幼稚園・小学校)』一粒書房、2016年、第1章第3節 幼児教育に携わる者に求められる専門性 第2章第3節 指導案の立て方・指導案 35-36、43-46

(学術論文)

- ・梶浦恭子「0～3歳児の自然体験遊びについて」名古屋学院大学論集. 社会科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 54(4), 171-181, 2018 <http://doi.org/10.15012/00001066>
- ・梶浦恭子, 西澤彩木「自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか: 幼児の行動記録を手がかりに」名古屋学院大学論集. 人文・自然科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 53(2), 125-138, 2017-01 <http://doi.org/10.15012/00000877>
- ・梶浦恭子, 今村光章「“森のようちえん”の幼児が触れる自然物に関する実証的研究」環境教育 = Environmental education 25(1), 176-183, 2015-07 日本環境教育学会 (査読有)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/25/1/25_1_176/_pdf
- ・梶浦恭子, 今村光章「なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか」環境教育 = Environmental education 24(3), 137-144, 2015-03 日本環境教育学会 (査読有)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/24/3/24_3_137/_pdf
- ・梶浦恭子「幼児の手が会える森の世界」岐阜大学大学院教育学研究科修士論文, 216, 2014-03
- ・木澤光子, 三輪聖子, 梶浦恭子, 馬淵知子「子育て支援の託児・ベビーマッサージを通して得た学生の学び」岐阜女子大学紀要 41, 143-150, 2012-03-15
- ・内田裕子 梶浦恭子 森俊夫「幼児の絵の色彩特徴と形態特徴の評価」日本色彩学会誌 36, 134-

135, 2012-05-01

- ・木澤 光子, 三輪 聖子, 梶浦 恭子, 馬淵 知子「子育て支援「ママパパの宝物」の取り組み」岐阜女子大学紀要 41, 151-158, 2012-03-15

(学会発表)

- ・梶浦恭子「自然環境に関わる乳幼児と保育者としての役割」一般社団法人日本環境教育学会, 2019-08
- ・梶浦恭子「自然環境と幼児」一般社団法人日本保育学会, 2019-05
- ・梶浦恭子「自然体験活動からの学び：対象（自然）物に向き合う場面において幼児と保育者が並列の位置で育むもの」一般社団法人日本環境教育学会, 2018-08
- ・梶浦恭子「自然物に出会う幼児の表現行為を探る」一般社団法人日本保育学会, 2018-05
- ・梶浦恭子「自然物にふれる乳幼児の表現行為を探る：0～3 歳児の抱っこや手つなぎから」日本乳幼児教育学会, 2017-11
- ・梶浦恭子「乳幼児が自然物とかかわる意味を探る：森の世界の出来事における手の行為場面から」一般社団法人日本環境教育学会, 2017-9
- ・梶浦恭子「自然物は幼児にどのような表現行為を生みだすのか：森のおやこクラス「おさんぽさん」の素朴な見える動きから」一般社団法人日本保育学会, 2017-05
- ・梶浦恭子「保育者から研究者へ - 現場出身者の課題を共有する」日本乳幼児教育学会, 2016-11
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手が作り出す表現を探る」日本乳幼児教育学会, 2016-11
- ・梶浦恭子「自然物を用いた幼児の造形活動における指導のあり方」日本環境教育学会, 2016-8
- ・梶浦恭子 作品発表「かくれんぼ絵本」絵本学会, 2016-5
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手の動きに注目して」日本保育学会, 2016-5
- ・梶浦恭子「自然物（枝など）に触れて遊ぶ幼児の行動からみえるもの」日本環境教育学会, 2015-8
- ・梶浦恭子「枝を持って遊ぶ幼児に関する一考察」日本保育学会, 2015-5
- ・梶浦恭子, 今村光章「森のようちえん」で磨かれる感性 (2) 日本環境教育学会, 2014-8
- ・今村光章, 梶浦恭子「幼児が「森のようちえん」で枝を拾う意味」日本環境教育学会, 2014-8
- ・梶浦恭子「人と人がつながるあそび かんたん手づくりえほん」絵本学会, 2014-5
- ・梶浦恭子「幼児の手が会う森の世界：行動記録を手がかりに」日本保育学会, 2014-5
- ・梶浦恭子「森のようちえんで磨かれる感性」日本環境教育学会, 2013-8
- ・梶浦恭子「森のようちえんで幼児は何に触れるか」日本保育学会, 2013-5
- ・杉山喜美恵 梶浦恭子「実習記録簿に対する保育所の意識 2. 調査よりわかること」日本保育学会, 2013-5
- ・梶浦恭子 杉山喜美恵「実習記録簿に対する保育所の意識 3. 自由記述から見えるもの」日本保育学会, 2013-5
- ・森俊夫 梶浦恭子「幼児にできる草木染めと科学遊び一色の不思議を感じる一」日本保育学会, 2012-5
- ・梶浦恭子「絵本のイメージと色彩的特徴—絵本の見方の一考察—」日本保育学会, 2012-5

(特許)

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

一般社団法人日本環境教育学会、一般社団法人日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本野外教育学会、絵本学会

○自己評価

学会発表は、事例研究から分析考察を2019年5月開催の保育学会で報告し、8月開催の日本環境教育学会で、事例をさらに分析して保育者の関わり方の配慮がどうであったかと、追究に向かう2段階の発表の方向性にして発表をした。幼児の行動の（教育的）意味付けが評価できる哲学的指標がまだ考えられていない。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

- a 学生委員会活動においては、多岐にわたる企画活動に最後まで仲間ととりくむことができる学生の行動や判断力育成を支援し、よりよい学生生活となるよう委員会の運営企画に携わる。
- b 国際交流委員会活動において外国留学を望む学生への関心を高め、その意欲を支援する。

（計画）

- a 学生が仲間と主体になって、最後までとりくむ学生たちの行動が発揮できるよう、また実践的に協働活動ができるようにする。五感を働かせ、感覚を磨く動き方、働き方ができ、大学が地域社会に向けて発信する運営企画に、学生は主体でありつつ教員は添いながら気持ちでは一体となり、計画、運営し貢献する。
- b 海外研修 A、B の企画運営等を行う国際交流委員会に携わり、学生に制度や内容に写真やスライド映像、企画資料で諸外国の教育、文化、情報等に関心が高く持てるよう、感覚的にも理解ができる伝達方法によって説明を行う。実施に向けて、月課題の計画した内容にならって進めていく

○学内委員等

- c 学生委員会委員、国際交流委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

- a 学生委員会活動では、学内の生活マナー向上に特に心がけ、喫煙場所の確認と吸い殻の始末については、禁煙マナー週を1月4週目に位置づけてアナウンスと喫煙場所巡回活動を試みた。学生へ積極的要望を委員が団結して行ったことは、学生と教員双方への認識を高めたといえる。
- b 国際交流委員会活動では、海外研修 A（夏休み）、海外研修 B（春休み）に教育学部生各1名の参加者の存在があったことは、学業ばかりか物の見方考え方の変化になる。海外へ夏期に行った学生による呼びかけによって、春休み海外研修 B 参加となった学生へと繋いだ。留学の関心を広めた結果と聞いている。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

- ①岐阜県私立幼稚園連合会子育て相談事業の巡回子育て相談員の業務を行い、近々の園内の状況を理解して授業に役立てる。
- ②図書館内の絵本を介した遊びを親子で行う企画をすることによって、子育て支援活動であったり、教育活動であったりする事例や援助方法の一例として学生へ還元できる。

（計画）

①巡回子育て相談を希望する幼稚園を訪問し、個別援助を必要とする幼児の活動内容場面の所見記入を行う。

・6月～9月の授業日ではない日を計画する。園内には様々な行動様式で自己表現する幼児（スペシャルニーズの子）がいるという現場の状況がこの業務において、把握確認できる。間接的ではあるが、授業において学生に還元できると考えている。

②内容を検討し、名東区のサービ斯拉ーニングを行う学生の社会参加する行動において参考になる。（参考内容：企画運営、安全管理、指導法等）

祖父江の森の図書館で読書月間等のイベント活動や祭り等に合わせ、内容は、児童文化継承でもあるからくり仕掛けの“「しかけえほん」を親子でつくろう”を行う計画である。

○学会活動等

日本乳幼児教育学会 2018 第 28 回大会 12 月 8 日 研究発表 I-3 「保育環境 1」座長

○地域連携・社会貢献等

・愛知県立瀬戸北総合高校 1・2 学年イベント「学びをまなぶ」講義 2018 年 11 月 26 日

題目：『絵本の世界』-絵本は子どもにとって物語の世界？知識の世界？科学の世界？それだけ？-

・一般社団法人岐阜県私立幼稚園連合会巡回子育て相談員

訪問場所：かたびら幼稚園 第二かたびら幼稚園 2018 年

訪問場所：第二かたびら幼稚園 2019 年

・図書館イベント活動

活動場所：稲沢市中央図書館 4 月、祖父江の森の図書館 11 月 内容：「くるくる絵が変わるしかけえほん」を親子でつくろう

活動場所：祖父江の森の図書館 2019 年 11 月 23 日、内容：一ぱつと開く「とびだすしかけ絵本」を親子でつくろう-の企画、運営

・地域連携 オープンカレッジ

題目テーマ『子どもと自然』-「森のようちえん」活動の子どもの姿から-

○自己評価

大学内開催であるオープンカレッジのテーマは、『子どもと自然』-「森のようちえん」活動の子どもの姿から-と掲げた。「森は、奥が深く暗くて、風の音や虫が怖い」とイメージを持つ人はいるだろうが、森に入って遊ぶ「森のようちえん」の子どもたちの実際を地域社会の方と参加学生に伝えたかった。なぜなら、赤い木いちごをほおぼり、星の形に見える白い花びらを見つけ、黄、黒色のクモの模様をじっと見る等、森の世界を子どもたちは冒険する。そのような実体験こそ、乳幼児期に大切な心身の発達や成長に影響をもたらす学びがあると考えているからだ。

実際に親子で森を散歩する乳幼児の姿（写真を示す）からは、何が大切な経験なのかを想像できる。日常生活にある身近な自然の遊び体験は、子どもの科学の芽の育ち、命ある生き物と関わる力、多様性、有限性、法則性と皆で考え合える要素となる素材材料がある。子育て家族の方とともに考えを深めるきっかけが自然体験活動する親子写真映像であったとオープンカレッジ開催において確信ができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

○研究課題「自然体験と乳幼児」をテーマに掲げ、日本保育学会、日本環境教育学会参加をしてきたことは、保育実習の在り方や「環境」授業の技術、知識が吸収できる。物の見方・考え方を研鑽し、

自己の感性を磨いく。学生への授業内容の指導に役立つ意味を追求するものである。

○行事型の保育「ぎふ☆森のようちえん」（月 1 回第 4 日曜日コース）の未就園児（1, 2, 3 歳児）と、通年型の保育「せた♪森のようちえん」（月 1 回第 3 日曜日コース）の未就園児（1～5 歳児）の保育スタッフとして自然体験活動を担当する。このことは、保育者として自然と向き合う乳幼児への援助の在り方や保護者対応等の追求となる。一般に、森のようちえん活動は、ナラティブ教育といわれるが、すべての子どもにバーチャル世界でない直接体験の必要性や生きる力の育成、教育の本質につながっているという理解を理論的に伝えられる努力を今後も行いたいと考えている。

以 上